

河内日下里、在生駒山麓國風之所稱、日下、一作草加、又作孔坂、方音皆訓久作嘉、故自修爲孔於文詞用之。

〔先哲叢談 續編九〕藤鳳湫

鳳湫、久野氏、本出自藤姓、故於文詞、去艸爲藤、嘗見細井廣澤談及我土氏族、廣澤又以出自藤姓、自修爲藤、既行之、先是安藤東野與物徂徠相謀於文詞、上一切爲藤、無作安藤者、鳳湫又沿時習也。

〔先哲叢談 續編十〕高芙蓉

芙蓉、自少壯、有故屢變姓名、而於文詞、以生于高梨郡、○本書上文、爲甲斐國高梨郡、然本國原無此郡名、可疑、修爲高氏、至其晚暮、歸復本姓、僅二年逝、故無知其舊姓者、概謂高芙蓉。

〔本朝文鑑 賦二〕硯賦 略 賦

北村 北季吟

〔多々良問答 四〕一姓を位に附、官に附て呼事候、たとへば藤宰相、菅三位などやうに稱之如何。

此事自然ニ書附タル人ヲ喚來候、無別之法樣候歟。

〔類聚名物考 姓氏九〕姓と官職とをとりて稱號とする事

その人の姓に、官職をとりそへて稱號とする事は、上古にはなかりしかども、中古よりこの事出來たり、たとへば菅三品とは、菅原氏の三位なればなり、大和物語に野大貳と見えしは、小野好古は、太宰大貳なりしかばいふの類ひいと多し。

〔隣女晤言 一〕苗字と字、一字づ、よぶ、

今俗に菱善、近五などいふたぐひに、家名と俗名とを一字づ、よぶ事、中昔よりの事なり、康富記云、今夜飯新許會、可出之三首、内々受指南云々、此飯新は、足利の家臣飯尾新左衛門尉なり、いにしへの曾丹、○丹後、曾禰好忠もそのたぐひなるべし。

〔袋草紙 三〕曾丹ハ丹後掾也、而始ハ號曾丹後掾、其後ハ號曾丹後、末ニ事舊テ號曾丹也、此時好忠歎